

RPAの数歩先を行く 経理・財務業務のさらなる自動化と自律化

今日、多くの企業がRobotic Process Automation (RPA) ツールによる業務自動化への関心を高めています。しかし、単に人が行っている作業をロボットに置き換えるだけでは、経理・財務業務の抜本的な効率化や業務改革は望めません。オラクルは現在、AI・機械学習やRPA、ブロックチェーンなどの最新テクノロジーをERPそのものに組み込み、標準化された業務プロセスをより高度に自動化・自律化する取り組みを推進しています。

SaaS型ERPによる標準化が業務効率化を加速する

企業経営の根幹を成す各種リソースを統合的に扱うためのシステムであるERPは、2000年代に国内でも急速に導入が進みました。ただし、当時導入した企業の多くは、効率化を目的に導入したものの自社の財務会計業務に合わせて複雑にカスタマイズして利用しているケースが見られます。そうした企業では、ERPのメリットである“業務標準化”や“効率化・自動化”の恩恵を十分に受けることなく、現在もさまざまな非効率が生じています。

例えば、販売システムなどで管理される売上情報と会計システムの情報の整合性を決算時に照合する「リコンサイル業務」は、本来ならERPによって大幅に効率化できるはずですが、しかし、ERPで業務標準化を行わずにそれぞれを別システムで運用している企業では、各システムから出力した集計データをExcelによって手作業で突合する作業が現場に大きな負担を強いています。

同様の非効率性は、予算編成・管理など管理会計の領域、さらにはグループ企業内における会社間取引の突合でも発生しています。グループ各社のシステムや業務プロセスがバラバラに運用されている場合、その整合性をとるための作業が電子メールや電話、Excelなどによって人手で行われ、それが連結決算処理の遅れにつながっているケースが多く見られます。

この状況を変えつつあるのがOracle ERP Cloudに代表されるSaaS型ERPです。

IT調査会社アイ・ティ・アール (ITR) は、2018年3月に発表した『国内のERPの提供形態別とパッケージ製品の運用形態別市場規模推移および予測』の中で、国内におけるERPシステムの利用形態として、2020年にはオンプレミスやIaaS上のパッケージ製品を抜いてSaaSがトップに立つと予測しています※1。

※1 ITR『[国内のERPの提供形態別とパッケージ製品の運用形態別市場規模推移および予測](#)』（2018年3月13日発表）。

この背景には、従来のようにERPを複雑にカスタマイズして利用するのではなく、サービス側に用意された標準プロセスに合わせて自社の業務を標準化し、SaaSならではの頻繁なバージョンアップによる最新機能のスピード導入と業務への適用というメリットを受けながら、本質的な目的である“経理・財務業務の改革”に注力したいと望む企業の意識があると考えられます。

実際、オラクルのSaaSを経理・財務業務で活用している国内企業にアンケート調査を実施したところ、多くの企業から「当初はコスト削減や“脱Excel”を目的に導入したが、SaaSではアップデートが頻繁に行われ、為替や与信管理情報などサード・パーティ・データとの連携や最新の端末の活用など最新機能がすぐに使えるため、それらを活用して現場主導でどう業務を改革していくかにリソースを集中できるようになった」というコメントがありました。SaaS型ERPを利用する企業は、すでにコスト削減や省力化の段階を超え、次のステップに進んでいるのです。

Oracle ERP CloudはAI、RPA、ブロックチェーンによる 高度な自動化のフェーズへ

Oracle ERP Cloudでは、これまで企業の経理・財務業務で必要とされる自動仕訳ルールの一元管理や複数会計基準への対応、目的別元帳などの機能を提供し、経理・財務業務の効率化を支援してきました。オラクルは現在、これらの領域の効率化・自動化をさらに推し進めるとともに、「AI・機械学習」や「RPA」、「ブロックチェーン」といった最新テクノロジーを駆使して、これまでERPだけでは自動化が難しいと考えられてきた次の業務領域に対してもさまざまな先進機能を提供し、自動化の範囲を拡大する取り組みを進めています。

- 取引収集領域における「グループ会社間取引」
- 業務処理領域における「連結管理とリコンサイル（勘定照合）」、「リスク管理と不正検知」
- 財務分析領域における「組み込み型BIとアラート」、「予算管理と管理会計」



以下に、AI・機械学習やRPA、ブロックチェーンなどの技術により、Oracle ERP Cloudがどのように進化しようとしているのかをご紹介します。

ERP組み込み型AI機能 (Adaptive Intelligent Apps)

AI・機械学習に関して提供する新機能は「Adaptive Intelligent Apps (AIA)」です。これは標準プロセスに組み込まれたAI機能であり、Oracle ERP Cloud内のトランザクション・データをリアルタイムに分析する従来のビジネス・インテリジェンスに加え、サードパーティが提供する各種データを利用して、例えば過去の取引履歴と学習結果に基づいて最適なサプライヤーを提案するといった具合に経理・財務担当者の業務をAIが支援します。

AIAの主な特徴として、大きく次の3つが挙げられます。今後、これらの特徴を備えたAIAを、コンプライアンスや決算などの各領域ごとにOracle ERP Cloud上に組み込み、順次提供していきます。

アプリケーション組み込み型AI

多くのAIパッケージでは、自社の要件に合わせてルールやデータ・モデルの設計・構築を行い、運用開始後は相応のメンテナンス作業が伴います。それに対して、AIAはOracle ERP Cloudに事前に組み込まれたAIであり、新たなアルゴリズムなどの開発も全てオラクルが行います。ユーザーは業務に必要なかつ最適なAI機能をすぐに導入し、活用することができます。

| Adaptive Intelligent Apps | アプリケーション組み込み型インテリジェンスの価値 |
|---------------------------|--|
| プラットフォーム | オラクルが提供するアプリケーション組み込み型インテリジェンスのメリット |
| データ・サイエンスの専門家が必要 | ビジネス・業務視点で利用可能 |
| 高い導入費用 | アプリケーション機能として既に組み込み済 |
| 高度な管理が必要 | 高度な管理は不要 |
| 要件に応じたアルゴリズムのカスタマイズ | 業務プロセスに合わせたアルゴリズム |
| スケール・メリットの恩恵を受けにくい | オラクルが開発・拡張、包括的にスケール・メリットを享受 |

サードパーティの豊富なデータを利用可能

AIアルゴリズムの精度を上げていくためには、機械学習で豊富なデータを利用できることが重要となります。Oracle ERP Cloudでは、企業が蓄積したデータのほか、世界最大規模のクラウド・データ・マーケットプレイス「Oracle Data Cloud」で提供されるさまざまな情報を利用し、経理・財務会計AIの精度を上げていくことができます。

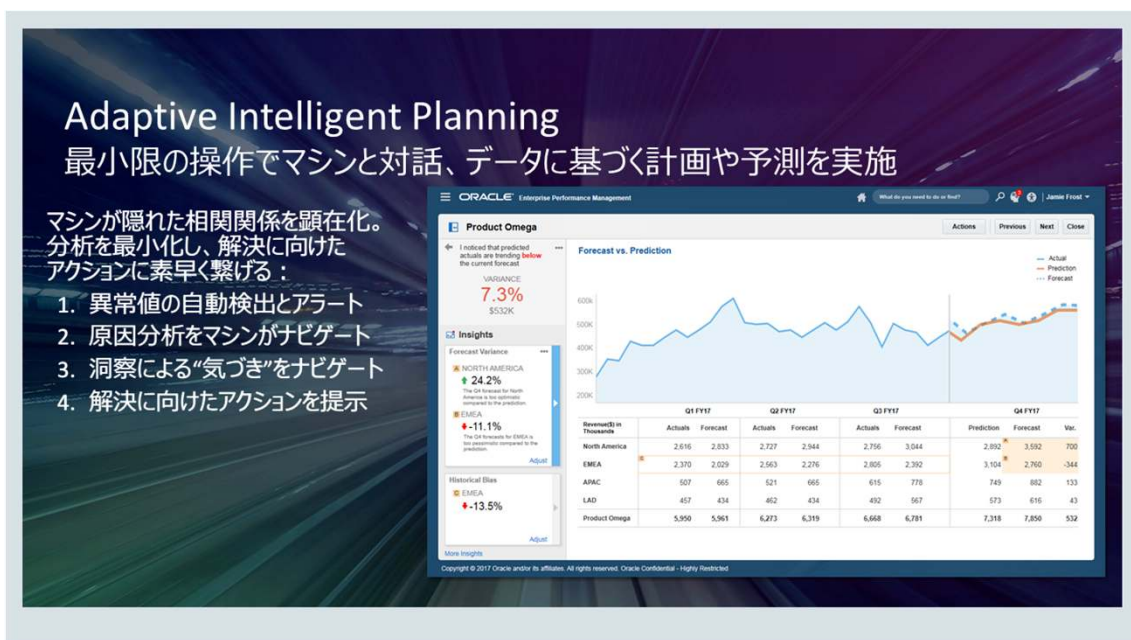
AI間連携

AIAはOracle Cloudの共通AI基盤として組み込まれており、ERPのみならず、人事やSCMなど他の業務に特化したAIと連携し、より高いレベルの自動化を実現します。

経理・財務会計プロセスのより高度な自動化 (Intelligent Process Automation)

従来、人が行っていたデータ入力業務などを自動化する手段としてRPAが高い関心を集めています。一方、Oracle ERP Cloudではすでにさまざまなデータ連携や自動化機能により、人による入力作業は最小限に抑えられています。そのうえで現在、オラクルがRPAによって推進しようとしているのが、業務プロセス全体の自動化です。これまで自動化が難しいと考えられていた業務領域の最新テクノロジーによる自動化を進めており、今後は「Intelligent Process Automation」というコンセプトの下に次のような機能を順次提供していきます。これらの機能もOracle ERP Cloudに組み込んで提供され、ユーザーは必要に応じて自社の業務ですぐに活用することができます。

(1) Adaptive Intelligent Planning (アダプティブ・インテリジェント・プランニング) — 予算編成や予実管理などの管理会計業務において、AIがサードパーティのデータも活用して精度の高い業績予測を行ったり、予測と実績が乖離した際にはAIが担当者と対話しながら要因分析を行ったりする機能

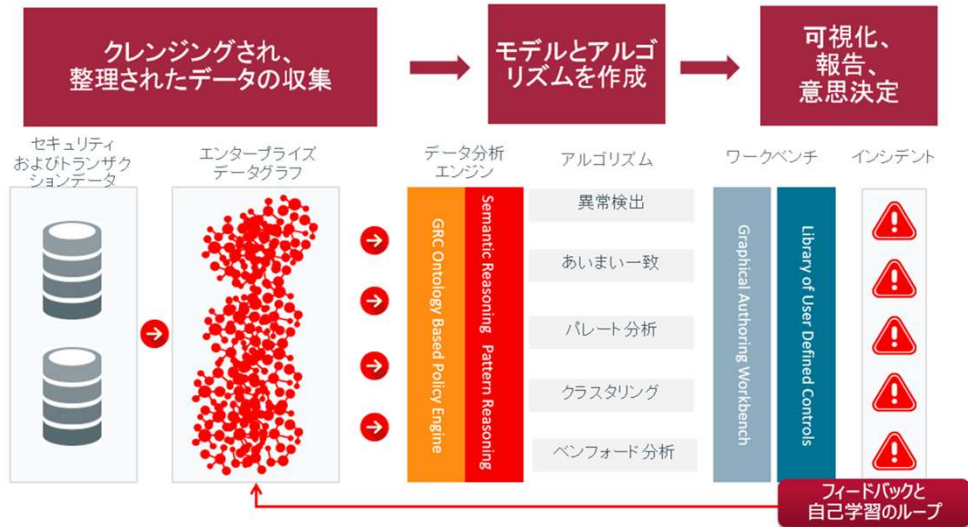


(2) Touchless Transaction (タッチレス・トランザクション) — 請求書などの取引書類をスキャンしてERP上に自動的に取引データを作成する機能。単にデータを取り込むだけでなく、請求書の書式変更などの例外発生時には、学習した内容に基づいてAIが正しい属性情報を提示する

(3) Automate Financial Controls (オートメイト・ファイナンシャル・コントロールズ) — データサイエンスや機械学習を利用した不正検知機能。業務プロセスごとに不正検知に有効なさまざまなアルゴリズムと学習機能を備えており、不審な会計取引を検知した際に通知する

Automate Financial Controls

リスクの早期検出を自動化する仕組み



「会社間元帳」などERP領域におけるブロックチェーンの活用

ブロックチェーンについては、ERP上の業務プロセスに関して次の領域への適用を計画しています。

- **会社間取引 (Intercompany)** — 会社間取引とリコンサイル業務における取引照合の効率化
- **価値交換 (Value Exchange)** — 支払い対象の請求書を用いたファクタリング（債権・債務買取）やマーケットプレイス上での売買
- **企業間取引ネットワーク (Trading Networks)** — ブロックチェーンのスマートコントラクトに基づく企業間取引やサプライチェーンの管理
- **記録用ストレージ (Records Storage)** — 学歴や資格、雇用記録などの分散管理

例えば、前述のように今日の企業では決算時のリコンサイルや会社間取引の照合に多くの時間がかかり、決算処理が大きく遅延しているほか、決算終了時まで各取引の最終損益が確定できず、グループ経営の意思決定が遅れるなどの不都合が生じています。

オラクルは、この問題に対する1つの解決策としてブロックチェーンによる「会社間元帳連携」を開発しています。これは会社間の取り引きを全てブロックチェーンのスマートコントラクトによって行うことで、取引内容をグループ内でリアルタイムに共有できるようにするものであり、すでに金融機関と共同で実証試験も進めています。



このように、オラクルは今後、Oracle ERP Cloudの標準プロセスで経理・財務業務を運用する企業に対し、さらに高度な自動化や自律化を実現する機能を提供していきます。これらの機能はOracle ERP Cloudに組み込んで提供されるため、ユーザーは特別な導入作業を行う必要はありません。必要な機能を選んで即座に自社業務に取り込み、本来の関心事である経理・財務業務の改革に専念していくことができるのです。

本件に関するお問い合わせ先

日本オラクル株式会社
 広報室 齊藤
 03-6834-4837
pr-room_jp@oracle.com